

皆さん、こんにちは。先月の六月二日に文京区シビックセンターで同朋大会がございまして、パネルディスカッションに参加させていただきました。たくさんの方々がご参加くださり、大変熱気のある素晴らしい大会であったと私自身感じております。その大会が終わった後、懇親会の席で天井が回って机の上に伏せてしまいまして。救急車でお茶の水の東京医科歯科大学付属病院に運んでいただき、点滴を受けるということがありました。夜九時過ぎてから安静になって、タクシーでうちに帰ることができたということでございます。やはり一旦体調を崩して健康を失いますと、本当に健康ということがどれほど大事であるかわからないということをつくづく教えられます。今日は来られるか心配だったのですけれども、こうして皆様にお会いできましたことを心から感謝しながら、お話をさせていただこうと思っております。

これは前に紹介したかもわかりませんが、第一回は「帰命無量寿如来 南無不可思議光」という、「正信偈」で一番初めの二句ですね。南無阿弥陀仏という念仏から「正信偈」は始まっておるのがあります。これは「正信偈」の全体を貫くということであると同時に、親鸞聖人のご生涯も貫くお言葉。それは私たち自身の人生全体を貫く、尊号。南無阿弥陀仏は名号、お念仏でございますが、その名号のことを尊号と。尊号というのはいと尊いという、本当に尊い。これ以上尊いものはないという。号というのはい名のりですね、呼びかけです。本尊とも言われますけれども本当に尊い名のり、呼びかけ。それが私たちに呼びかけられておるといふそういう意味があるわけです。

その「正信偈」が「帰命無量寿如来 南無不可思議光」から始まっていることが大変大きな意味があります。念仏をいただくといふところに自ずと喜び、感動が与えられてくる。それは同時に本当に自分自身の姿を知らされるといふ、そういう悲しみですね。それは人間の悲しみという次元を超えて、如来様の悲しみに遇うといふ。如来の大悲に遇うといふ意味があるのです。大いなる悲しみ。これは非常に大きな意味がございまして。

必ず生きるということはい苦しき悲しみ、そういうものに出遭わざるを得ません。いくら逃げてい避けてい出遭わずにはおれませんが。遭った時には、「どうして自分だけ、なんでこんな悲しい目に遭わなきゃならんのだろうか」と思ひ込んでしまうといふことがございまして。そういう悲しみを通してそして聞法の教えに遇う。本願の教えに遇う。如来の大悲に遇う時に自分自身の存在もまた大いなる命の中の存在であって、如来の悲しみを受けておる存在なのだといふことに気付くといふことがございまして。

すると、個人的な悲しみは単なる個人の悲しみに終わらない。自分自身に出遇い、人様に出遇っていく。人間と人間とが深く交わりあっていくといふそういうご縁となるといふことがございまして。そういうことに気付きますと、このいただいた命はなんとまあ大事な、何事にも代えられない命をいただいで生きておるのであります。誰がその命をいただいで生きておるのかといへば、私であるといふことに気付くといふことがございまして。

そういうことを詠われた念仏詩がありまして、「最高の不思議なもの。いのち。それが今ここにある」。ここにあるといふのは、私自身のところにある。最高に不思議なもの。不可思議ですね。不思議といふことはいわゆるわけのわからない不思議ではなくして、明らかな事実としてあるのであるけれども、それは人間の理屈や思ひ計らいで量れるようなものではないといふ。東井義雄さんといふ方の詩です。

私は体調を崩して、そういうことを改めて教えられました。これは親鸞聖人が「正信偈」の初めに「帰命無量寿如来」、量り知れない無限なる命の用きである如来様に遇い、その如来様の用きこそ、本当の依りどころとして帰依して生きることができるといふのでございまして。南無といふのは帰命つ

てことですが、不可思議光如来と。不可思議というところには、人間のあらゆる私擬、思い計らいを超えてはたらく真実の智慧の用きである如来に帰命いたしますという。そういう人生の依りどころと、そして生涯全体を貫く本当の尊ぶことのできる、そういういつも現在の自分自身が照らし出される、そういう教えに出遇ったという感動が与えられる。そのことは真宗門徒にとりましては、私どもは家庭にお内仏をいただいて、お参りさせていただくと、お勤めをさせていただくと。あの「正信偈」をお作りになられた方が親鸞聖人でありますから、そこに親鸞様とご一緒にいただいていくと、そういう意味がございます。

曾我量深先生のおっしゃった言葉として「正信偈の一句一句が南無阿弥陀仏。念仏であります」という言葉をお聞きしたことが私には忘れられないのであります。念仏の中の人生。念仏に聞いて生きていくことのできる、そういう人生を私たちは与えられているのであると。お内仏にお参りして「正信偈」をあげるということが、親鸞聖人ましますという、そういう意味を持つのであります。遠く七百年昔の遠いところに親鸞聖人はいなさるのではなくして、お内仏にお参りをしてお念仏の申すところに親鸞聖人ましますという意味が与えられるのであります。

なぜそういう意味が大事であるかと言えば、人間は迷いや煩惱の深い者であるからです。その時の人間はというのは誰かと申しますと私はということであります。私は大変ありがたく嬉しく思いますのは、自分自身がかっこをつける必要がないということをお教えされました。どうしてもかっこよく見せて称賛を受けたいという。そういうものが人間の中にはあるのだと思います。しかし、親鸞聖人の教えに遇うと、「またかっこつけてますね」と言われる。そういうお心が伝わってくるとき、自分の依りどころというものが与えられる。

これは曇鸞大師の言葉の中に「顛倒の見」というのがあるのですけれども。これは人間の迷いですよね。本当に大事なものが大事であると見えないで、大事ではないものを大事にしてしがみついてしまうということです。顛倒の見に陥った人の一番大きな特徴は、自分が顛倒の見に陥っていることに気が付かないことです。自分ほど大事なことを言っておるものはないという、そういうことなのですね。

例えば子どもを育てるときに学歴が大事、金が大事と、ついつい言ってしまうということがありますね。確かに大事かもしれませんけれども、それがなければ生きていけないかという、そうではありません。むしろ学歴とか金とか名誉に縛られることにおいて、人間性を失うということがあるわけです。自損損他する。自障障他とも言いますが。自障と障他という風に考えるかもしれませんが、そうじゃないですね。自障は必ず障他する。自ら妨げるということはそこに自ずと他を妨げるという必然的な自然な道理であるということをつくづく知らされます。俺一人のことじゃないかと、どうなろうとあんたに関係ないというようなことを言うかもしれませんが、それは見えていない証拠ですね。

素朴なことで申し上げますと、もし自分がこの損なってますね、自暴自棄になるならば、本人自身が苦しいばかりでなく、深いご縁のあった親たちも苦しみ悲しまれます。また、その人と関わりの深い兄弟や友達も、必ず影響を受けるわけです。そこには自分一人なのだけでも一人ではないと。量り知れない命の中に、量り知れない人々と共に生かされているというそういうことが教えられている。これは人間としては非常に大事なことであると思います。不可思議な、最高に不可思議な命、それをいただいて今ここに生きている。生かされてあるのだなあということを教えられます。

今日はですね、「正信偈」の始めの二句に続きまして、法蔵菩薩が本願を起こされたところを学ばせていただきたいと思います。お手元の「正信偈」のテキスト現代語訳のほうを、五ページの始めから六ページの最初の一段のところまで一緒に拝読させていただきたいと思います。

生きとし生けるものを
喚び覚ましてやまない
無量寿如来に帰命し、
思いはかれない智慧のみ光に帰依いたします。

その昔、あなた（阿弥陀）が
法蔵菩薩として道をもとめておられたとき、
世自在王仏という師におつかえし、

あらゆるみ仏の世界の成り立つ原因と、
その国土の人間と天人の
善し悪しのすがたをみきわめて、

すべての人の依りどころとなる浄らかなる
国土を建てようと、この上なく素晴らしい願いを打ち立てられ、
みな共に目覚めようとの、またとない誓いをおこされました。

どうもありがとうございます。宗祖がご製作された偈文を現代語訳させていただく上で、言葉は少し長くなっても宗祖が歌われておる「正信偈」のお心ができるだけ現代語の上で表現できるようにと願って現語化させていただきました。これは文脈を読むという。これはもう私自身今までの歩みの中で先生方から教わってきたことであって、本当にそうだなと思うことなのです。文脈を読むということは、その文章が何を語っているかということ、文章の流れ、展開を通して読んでいくと。

今日は「法蔵菩薩因位時 在世自在王仏所」から「建立無上殊勝願 超発希有大弘誓」までと思っておりますが、文脈を読むということをして仮に忘れると、単語に引っかかるのですね。法蔵菩薩って言われているけどなんだと。因位ってなんだと。世自在王仏ってなんだと。いちいち。単語ももちろん大事な意味があるのですよ。でも単語に引っかかってあんまりそこにこだわると、文章の流れ、展開ということを見失ってしまう危険性があるわけですね。今日の一段のところで主語と述語をはっきりさせるならば、法蔵菩薩が世自在王仏のみもとにおいて、諸仏浄土の因、国土人天の善悪を覩見して無上殊勝の願を建立されたと。希有の大弘誓を超発されたと。そこに非常に大きなダイナミックな根本があるわけですね。

どういう形で起こされたかということ、法蔵菩薩が世自在王仏に出遇われて、諸仏浄土の因、国土人天の善悪ということをお教えられて。それを受けて本当に大事なところを選び取り、どうでもいいことは捨てて、無上殊勝の願を建立され、希有の大弘誓を超発されたという。そういう大事な根本になる事柄が歌い上げられている。これは法蔵が法蔵としての名のりをあげ、四十八願を建立され、修行して成就されることにおいて阿弥陀となったという。そういう意味があるのですね。そのことは私たちの人生において、あなたは何を本当の願いとしておられますかと、そういうことに変わってくるわけですね。

本当に全生命、全存在を託することのできるような願いというものに出遇わないならば、その人の人生は流転の、空しく過ぎていく人生であるということではないでしょうか。だから本願の話は決して物語の世界だけの話じゃない。私たち自身において、何があなたにとっての本願として、あなた個人の願いじゃなくして、あなたの全存在を揺るがしてやまないようなそういう本当の願いを見出されておられますかと。そういう課題、問いかけとして問われていると思います。

親鸞聖人は、命をかけて歩まれた求道の人生において、よき人、法然上人に会うことにおいて、真実の教え、『大無量寿経』の教えに出遇われたと。それは阿弥陀の本願真実が説かれ、その本願真実は南無阿弥陀仏の教えとなって、十方のあらゆる衆生の上に用いて、平等に人間を呼び覚ましていく教えであると。これはもう画期的な教えですね。

人間の頭が良いとか悪いとか、男であるとか女であるとか、戒律を守るとか守らないとか、善業を行なうことができるとかできないとか。一切の条件を問わないで、十方衆生の上に、そこに人間がおられるならば、あなたという存在がおられるならば、そのあなたの上に、如来の真実が展開、開かずにはおれないと。そういう教えが『大無量寿経』に説かれておる阿弥陀の本願真実である。十方の衆生、皆もれず、一人ももらさず救い遂げるという誓いです。

しかしそこに大事な問題があります。そういう仏法は明らかに成就しておるのでありますけれども、その成就に預かるか、目覚めるか、気が付くかどうか、ということがあります。よく言われる例で言えば、馬を川の水の流れる所までは連れて行くことができるけれども、飲むか飲まないかはお馬さん自身だと。お馬さんが飲まなければ水の美味さはわからない。水がどれだけ大事かは飲んで初めてわかるわけですから。私たちが縁に触れて仏法を頂戴して目覚めるか目覚めないかということは、私たち一人ひとりの上にかかっていると。

「救うか救わないか」という責任は如来様にあると。「救われるか救われないか」という責任は私たちにあると。だから全く如来の本願他力であるからと言ってですね、私たちには何から何までね、全部ご他人任せではありません。本願他力であるがゆえに、それに気が付くか気が付かないかは私たち一人ひとりにかかっていると。

それはそこまで尊重されているということですね、人間が。どの人にも仏法に目覚める存在としてこの世に生まれたと。いただいた命がどれほど尊いかということに気が付いていかれる存在であると。仏の大いなる喜び、幸せ、覚り。それに目覚めていくべき存在であると。これはもう全面的に根本的に人間存在が信頼されている、願われているという。本願ということは、十方衆生が目覚めなければ、法蔵菩薩は阿弥陀とならないという誓いでありますから。如来自身が如来の全生命を衆生にかけていると。私にかかっているという意味ですね。そこまで私は具体的ではっきりしている教えであると思います。

なんで法蔵菩薩様がそこまでご苦労なさるのだろうかということをよくよく思念するならば、十方衆生のためである。十方衆生ということはなかなか救いがたい。目覚めがたい存在であると。その救いがたい目覚めがたい存在は誰かと言えば、私であったと。私であるということに気が付くとね、この法蔵の用き、発願ってということが身に迫ってくる。そういうことが自ずと感じられてくるかと思うのであります。

この教えはですね、『大無量寿経』の中に説かれておる言葉ですね。親鸞聖人は『大無量寿経』こそが真実の教えであると。そこに浄土真宗が表されているということをしていただかれておるわけでありまして、『大無量寿経』に釈尊がこの世に仏陀として出現なさった本懐。本当の願いが説かれておるということで受け止められておるわけでありまして。その真実の教を顕さば、すなわち『大無量寿経』これなりと。『大無量寿経』こそが真実の教えであるということをはっきりと表わされまして。その大無量寿経には本願を説いて経の宗致、根本精神とし、南無阿弥陀仏の名号を説いて、大無量寿経の体とすると。本願が宗ということは根本精神ですね。これは私たちの人生を、あなたの人生において何を根本精神として生きておりますかということが問題になっている。

いつもそのように生きていますよ。気が付いたら遅かったと、そんなことがあるのですけれども。でもね、遅かったらだめじゃないのです。そこから始まるのです。そこは世間の物差しと違う所ですよ。仏法は遇い難いかな。気付いたところから本当の歩み、人生が始まると。人生の深さ、

広さ、豊かさですね。実りですね。本願を問うて『大無量寿経』の宗、根本精神にする。南無阿彌陀仏の名号を説いて、大無量寿経の体。体っていうのは全体に行き渡っているという意味ですね。『大無量寿経』の宗体を教えられるとね、私たちの人生の宗体が問われているのだなあと思いますね。本願のお心に目覚め、念仏に生かされるということに気付けば、人生の全体が如来の本願の中にある、念仏の中にある人生であると。

だから命のある限り本願名号の中にある人生であると。これはね、大変厳しい現実がもちろんあるのですが、私が今行っている病院で年配の方でね、意識がわかるかわからないかというような感じの方々が運ばれていく。そういう姿を目の当たりにいたします。そういう姿を拝見する時、ああこれが人生の事実なのだなあということを知られますね。いくら自分だけは絶対そんなのになんたたくないと、縁があればそうなりうるわけですね。

曾我量深先生という方が万年おっしゃっておられたことの中に「聴聞」ということを大切に生活させていただくということがあります。仏法を聴聞する。こうして仏法の教えを聞かしていただくと、本願のお心、念仏のいわれを聞かしていただくと。これはお互いに聞かしていただくのであります。私自身は話をさせていただくという大切な縁をいただいて聞かしていただくという意味があります。

曾我先生がおっしゃったのは、聴聞に心をかけて生活をかけて生きる時、耄碌するってことがありますわと。それがはっきり言えるだろうと思います。しかし言うまでもなくご縁があれば認知症にもなるだろうし、耄碌することもあるだろうと。しかし聴聞ということに生活の中心をおいて生かさせていただくならば、耄碌するということはありませんわという。それは大切な真実の言葉であると思います。

そしてもし、仮に寝たきりになったとしても、寝たきりの場が聴聞の場であると、こういうことがはっきりと言えらると思います。そしてどのような状況の中にあろうとも、本願に願われておる。念仏に呼びかけられておるそういう用きの中の人生であるということがはっきりしていると思います。そういう眼をいただくとき、どういう展開があるかということ、例えば寝たきりになって。世間的な価値観というのは世話ばかりかかるから迷惑だということになってしまいかねないけれども、本願の眼、念仏の教えというものをいただくと、ああこの方はこういう姿で人生をまっとうしておられるのでありますねと。

そこに厳粛なる人間の事実に触れる。本人に仮に意識がないとしても周りの方には、ああ世話をさせていただくのだからと、ああこれが人間の現実なのだからということをお教えられながら、自分自身の人生を本当に尊重しなければならぬ。だから寝たきりの方の姿を通して教えられるのが自分自身である。いわゆる日本が高齢化社会に入っておりますけれども、私は親鸞聖人の教えをいただいてですね、そういう人生の最後の最後までそこまでにいたる全人生が仏法の中なる、本願の中なる、念仏の中なる人生であるということに眼を開かれていくということが本当に大事なことであります。それは厳しいですが、また悲しい、寂しいことであるかもしれないけれども、そういう現実を通して如来の大悲に触れるという意味があると思うのであります。

かの法蔵菩薩が因位の時。因位の時というのは、世自在王仏という。また『大無量寿経』をいただきますと、スケールが大きい展開があるのであります。王舎城の耆闍崛山において釈尊の上にたくさんのお弟子方がそばにおられたと。その時にお弟子の阿難尊者が釈尊の光顔巍巍とした大変光り輝くそういうお姿を拝見して「なぜそのようなお姿をしておられるのですか」ということを、釈尊を称えて問われるわけですね。それに対して釈尊は、「それはあなた自身の考えで問うたのか」ということを聞かれて、「私の、他の者に教えられたのではなくて私自身が感じたところで問うのであります」と。釈尊は「よくぞ問うた」ということを言われて、出世本懐の教えを説かれるわけで

すね。

そこにはね、私は値遇、出遇いですね。これは本当に出遇いということが私は根本的な大事な意味を持っておると思っています。尊い方に身近に出遇っていてもその方の尊さに気が付かなければね、出遇わないのと同じなのですよ。出遇ってみると、なんとまあ素晴らしい人であるかという、そういう仏陀との出遇いってことは本当に尊敬できる、敬うことのできるそういう人に出遇うってことが人生の根本のことであるということをお教えられるのであります。そういう出遇いの尊さということをお教えられますと、私は日常的な人間の出遇いが、本当に出遇いとなっているかという。そういう人間の生活自身が問われていると思えます。

一人ひとり、大事な仏弟子たるべき仏弟子であり、仏となるべき人と出遇っているわけですがけれども、そのことに気が付かないならば、日常的な人間関係。好きとか嫌いとか、都合が良いとか悪いとか、自分の煩悩をどの程度満たしてくださるのかという計算にいつてしまう。共に仏弟子として出遇うという御同朋御同行として出遇うという、そういう出遇いが開かれているかどうかということが問われると思うのですが。阿難尊者はですね、釈尊のお姿に非常に尊い光輝くばかりのお姿を拝見していく時期が熟したのでしょうかね。そのように称えられて質問された。それで釈尊は如来の出世の本懐の教えが開かれる大事なご縁であるということで『大無量寿経』の教えを説かれる。

その中に法蔵菩薩が出てくるのですけれども、世自在王仏までですね、常光如来から過去五十三仏の伝統がある。その次に世自在王仏が現れて、一人の国王があつて、その国王が世自在王仏の説法を聞いてですね、目覚めると。この世自在王ということも、これはもう象徴的な名前ですね、世において自在である。そういう王ということも、単に位じゃない。本当に尊い、中心になるような。仏とは目覚めたる者、覚者ですね。世自在王仏。この名を聞くと、あなたはどうですか。世において不自由な、使われておる存在だと言いませんか。単なる名じゃないですよ。この名ということはこの世間ということ。

これはね、大人社会の影響っていうのは本当に大きいですよ。岩手の方でいじめが関係して、自死をなさった。電車で飛び込んだのですかね。悲惨なことですね。子どもたちだけの問題じゃありません。やっぱり世間の影響を受けるわけですよ。親たち、家庭の、あるいは周囲の。ですから本当に自在じゃない。学校へ行きたくないとか死んでしまいたいとかね。地獄じゃないですか。我が子でなければいいってもんじゃないでしょう。やっぱりいかに世自在っていうことを失っておる存在であるか。

その世自在王仏のもとに一人の国王があつて。国王が世自在王仏に出遇って、仏の説法を聞いて、深い喜びを抱いて。感動をもってですね、国王は国を棄て、王を捐てて、行じて沙門と作った。名づけて法蔵という。これ自ずと浮かぶ人がおるでしょう。釈尊ね。国王の子として生まれて非常に苦悩されてね、国を棄て王の位を捐てて、一求道者になったという。だから『大無量寿経』の中にはそういう個人の名前は出しておりませんが、物語として非常に深い仏法の真実を表わしている。国を棄て、王を棄てて、行じて沙門と作り、号して法蔵と曰いきという。

真実を見失う時、やっぱり危ういのですよ、国も王も人間存在も。だから世自在王仏に出遇ったという私は、師に遇うという。師仏に遇うということがどれほど大きなことであるかと。これは私たちの人生において、よき人に遇うということが本当に大きなことであると。親鸞聖人に遇う、親鸞聖人の教えに生きる人に遇うということにおいて眼が開かれ、本当の願い、本願に生きることが開かれてくる。

この光顔魏魏ということは法蔵菩薩が世自在王仏を称えた偈文ですね。世自在王仏のようになりたい。尊い世界を実現していきたいということを述べるとき、どうぞその道を教えてくださいということを世自在王仏に願われるわけです。その道について世自在王仏は法蔵菩薩に対して、「如

自当知」。汝自ら当に知るべしと。『大無量寿経』の中にある。世自在王仏が法蔵菩薩に向かって言った言葉なのです。後ろの床の間にあるこれは東本願寺の門首様が書いてくださった。こういう立派な迫力のある書ですね。この「如自当知」、汝自ら当に知るべしということを世自在王仏が法蔵菩薩に対して言われたのです。

師仏の言葉ではありませんが、その世界、仏様の世界は私の分限を超えている、大いなる仏道であります。「非我境界」。我が境界に非ずと。これはね、人間の理想と本願との根本的な違いだと思います。人間の理想は、確かに立派ななくてはならない面がありますけれども、人間を全面的に育て、養育し、満たすだけじゃありません。人間を殺してやまないものがあるわけですね。原爆がそうでしょ。水爆がそうでしょ。今の時代だって IT が盛んになっておるからといっても非難中傷、そういうことがある。だから人間の理想っていうことは人間中心の欲望がある。己に良いものは必ずしも他者には良くないと。

法蔵菩薩という菩薩ということはどうですか、ボディーサットバと言いますが、目覚めた有情。菩薩ということは自分が目覚めるということと、人様が目覚めていくことと同時に一つのこととして生きるのが菩薩なのです。自らが目覚めを求めるということが同時に人々も目覚めさす用きになると。これが菩薩です。

親鸞聖人の大事にされた言葉で言えば、「自信教人信」という。自ら真実の信心に目覚めるということは人々の上に真の信心が展開するという、そういう歩みです。「難中転更難」、この難に過ぎたるはなしという言葉がありますけれども。これは親鸞聖人の人生そのものです。親鸞聖人ご自身が自ら目覚めるということに終生をかけられた。それは同時に量り知れない人々を目覚めさすにはおかないと。そういう用きを生んでいるわけです。

これは親鸞聖人だけのことではありません。親鸞聖人の教えに触れて私たちが真の信心に目覚める時、そこに自ずと他の人々に感化せずにはおかない、そういう用きが起ると。如来が用いてきたのであります。世自在王仏と法蔵菩薩の出遇いっていうことが、よき人自身の伝統となって培われておる。その仏道を実現しようとする。それは我が境界ではないという、そういう「非我境界」。

それに対して私たちはともすれば自分の境界ですね、自分の欲望中心。まあせいぜい人間の理性というか、そういうものが中心。それは世界そのもの、量ることのできないわけです。我が境界は有限であり、相対であります。だから汝自ら当に知るべしという言葉はですね、私はあらゆる人間に対する根本的呼びかけだと思ふのです。あなたはあなた自身に本当に気付いていますか。目覚めていますか。

ソクラテスの言葉の中に、「汝自身を知れ」という言葉があります。これは永遠の言葉だと思ふのです。それに対して私の境界ではありませんと。どこまでも仏様の教えをいただいていくのであります。そこで世自在王仏は、諸仏浄土の因、国土人天の善悪ということを経験させしめて、その中から法蔵菩薩が無上殊勝の願、超世希有の大弘誓というものを押さえていった。

法蔵菩薩のことで是非申し上げたいことがあります。これは、松原祐善先生のお友達に黒田沐山居という詩人がいらして。幼い時にお母さんと布団の中に入って寝る時に、田舎でね、蛙が、うおんうおんうおんうおん鳴いていると。そのお母さんは小さな子どもに、蛙の鳴き声は法蔵菩薩様ですよ、言うのです。私はね、実感のある歌だと思ふのです。単に蛙が鳴いているのではなくして、この大自然の営みそのものの中に、蛙が鳴いている。蛙の声に励まされて農作業をするというような意味ね。だからそこに生活が人間中心じゃないのですよ。そういうようなことが歌われています。

それからもう一つね、木村無相さんという方がいらっしやいまして、この方は一生涯を聞法、求道にかけられた方なのです。私は木村無相さんの名前は十代の時に京都の一燈園に就学のご縁をいただいた時に、印象に残った方なのです。『念仏詩抄』というものを出版されて。もう木村無相さん

の生活それ自身が念仏のある生活。その木村無相さんも若い時には随分悩まれてね。色んな所に尋ねて行って修行なさった方です。自殺を思われたこともおありになったようでございます。なんか求道一筋というと木村無相さんの顔が浮かんでくるような気がするのです。その木村無相さんの『念仏詩』の中に、「涙には涙に宿る仏あり。そのみ仏を法蔵という」というね、詩があるのですよ。私はこの詩は初めて読んだ時から忘れられない。

それから諸仏ってことが出てきますけれども、木村無相さんは皆諸仏と、一切衆生皆諸仏と。これは飛躍的なことになりますけれども。「若不生者」という、若し生まれずんばという。浄土の教えに生きるというそういう目覚めて生きるということがないならば、私は仏とはならないという誓いなのです。自分自身の上に若不生者の誓いがかかっているのです。かかっているのだけれども、自分のこととして聞けないという問題を人間は持っておるのです。若不生者の誓いゆえ、一切衆生皆諸仏という。過去現在未来の諸仏である。一切衆生は諸仏であるというのですよ。どうでしょうか。これは人間の本当に深い出遇いじゃないでしょうか。自分に出遇いをいただいておる人間の交わりというものが仏の教えをいただければ、本願のものに出遇えば、諸仏として用いてくださる。

日常的な価値観ではなかなかそういうことは言えません。嫌なことをいう人もあるし、蹴飛ばすものもあるし、とてもじゃないけど。しかし本願に出遇って本願の教えというものをよくよく人間の苦悩の深い現実の中にいただいているという、ああ私自身に目覚めを促して下さっておるのであるという。そういう出遇いがね、開かれてくるということがあると思います。

曾我先生は法蔵菩薩の問題を非常にご生涯の問題として取り組んでおられたのでありますが。「如来は我なり」と。如来というと、立派な尊い人であるというので自分とは別に見てしまう。対象的に見てしまうということもある。曾我先生はですね、親鸞聖人を本当に深く聞かれ、「如来は我なり」。まあ「されど我は如来に非ず」ということをおっしゃってね。「如来我となりて、我を救いたもう」と。仏様が私となって私を救ってくださる。目覚ましてくださるのであるということを言われて、そして「如来、我となるとは法蔵菩薩の降誕のことなり」。これが凄いですね。

この言葉はですね、清沢先生のお言葉をいただくと非常に明快なのです。しかし絶対無限の妙用が相対有限の自己の上にはたらくと。絶対無限と相対有限という関係から言えばね、これは人間の理想は相対有限ですよ。仏の本願は絶対無限です。絶対無限の用きであるがゆえに相対有限の上に如来は如来自身を表す。法蔵菩薩の降誕。法蔵菩薩が生まれてくださるのです。どこに生まれるのですか、私自身の中です。苦悩を抱えて生きておる人間のど真ん中に精神生活の最も深いところに誕生してくださる。

これは私が東京の教学研究所と教務所にご縁をいただいて、昭和三十七年でありましたが。曾我先生が毎年東京に教学講座で来て下さって。先生に、講題はあるかと聞かれて法蔵菩薩と。そのとき「法蔵菩薩は阿頼耶識」であると、阿頼耶識っていうのは人間の精神の営みの中の最も深いところですね。そこに法蔵がはたらいておると。公明正大なはたらきが一人ひとりの人間の中に用いている。これは大変な意味があるのです。私たち一人ひとりの中に本当に人間が主体性に目覚めてやまないそういう用きが私自身の中に脈打っている。それを「法蔵精神」と言い、「法蔵魂」と言うわけです。

どうでしょうか。私は親鸞聖人の教えはですね、そういう人間一人ひとりが、法蔵の精神に促されてこの人生に主体性を失うことなく生きていくことができるのである。そういう人生を見出していけるという大きな意味を持っていると。人間は付属物でもなければ物でもなければ、不要な人間の計算の価値観の中に収まるものではない。精神、魂というものが一人ひとりの命の深くに脈打って生きておるような、そういう存在なのだ。だから法蔵菩薩の本願建立というところに法蔵の深い命の喜び、感動があるのです。その本願に触れて私たちは私たち自身の人生の尊い意味、喜び

を見出していくことができることを教えられます。すいません、時間がだいぶ長くなりましたが、話のほうはこれで終わらせていただきます。どうもご静聴ありがとうございました。